

世界旅打ち気分

●第71回・イギリスの競馬場2場

須田鷹雄



写真1) チェルムスフォードシティの直線。奥が競馬場外側。



写真2) サンドウンのゴールシーン。奥に直線コースが見える。



写真3) サンドウンのパドック。左がスタンド。

<https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/>

先日、ちょうどコースになったイギリスの競馬場での事件を御存知だろうか。

出走馬たちが左回りのコースで3〜4コーナーを回り、直線に向いたらそこにゲートが残っていた！という事件である。3〜4コーナーの中間地点で旗を振って知らせる人がいたこと、騎手たちの止め方が上手かったことで、幸い事故は避けられた。

2012年にアメリカのフージャパークでも似たような事件があり、そのときは落馬する騎手やラチに突っ込む馬もいて大変だったが、今回はそのまでの事態にはならなかった。

今回事件が起きたイギリスの競馬場は、チェルムスフォードシティ競馬場である。事件の様子はX(旧ツイッター)などで動画が拡散されたのだが、事件に目が行ってポストを見た人が誰も指摘していないことがある。

東京競馬場をイメージしていた。4コーナーを回って直線を走る馬たちを後ろから見たら、右側にスタンドが見えるはずである。しかし、今回の動画では右側にスタンドが無いのだ。

いる。パレードリングはもちろん内馬場にあるので、スタンドとすぐ行ったり来たりできるようにしている。

場所はチェルムスフォード駅からバスに乗り、バス停から15分とまあまあ遠い。そのバスも本数があるわけではないので、レンタカー利用のほうがが無難だろう。

続いて、同じイギリスからサンドウパーク競馬場を紹介しよう。こちらの開場は1875年というからさすがの歴史である。

日本のファンにもエクリプスがされる競馬場としておなじみだが、障害でもG1格のレースが行われるので、平地・障害どちらのファンも楽しめる。

コースは右回りで一周約2645m。それを右から左に貫くように直線コースが作られている。ゴールシーンの写真を撮ろうと思つて構えていたら、「あ、これ直線のレースだった」という経験もした。

コースの印象はというと、とにかく広い。そして、高低差がすごい。そもそもイギリスの競馬場はそういうところが多いが、スタンドからコースを見下ろせるので、全体像がよく分かる。19世紀には重機なども

なぜかというところ、チェルムスフォードシティ競馬場は、内馬場にスタンドがある競馬場だからである。

まずはこの競馬場そのものについて説明しよう。開場は2008年と最近のことである。イギリスで2番目に古い競馬場、トーントン競馬場が1977年開場だということから、80年ぶりの競馬場だった。なんでも、イギリスでは周辺人口が100万人いけば競馬場が成り立つと言われているので、ロンドンの北東80キロほどのところにあるこの競馬場は、その条件を満たしていたらしい。

しかし08年といえば、日本でも地方競馬場がバタバタと潰れていた頃。この競馬場は経営がうまくいかず、09年には早くも閉鎖に追い込まれてしまった。

競馬場が再開したのは15年。オリジナルコースであることを生かし、他場との日程調整もうまくいっているのか、その後はなんとかやっているように見えた。競走も2つある。開催日もそれなりに多い。ロンドンから近いし主要場との距離も近いので、騎手のメンバーの良い開催もある。筆者が19年に

ほとんど無いだろうから、自然の地形に沿ってこのコースを作ったのかなと思いを馳せることができる。

パレードリングは大きく、なかなか雰囲気が良い。椅子もたくさん設置されていてありがたい。そのパレードリングから本馬場に馬たちが向かう通路はロードデンドロン・ウォークと呼ばれているので、そこで馬たちを待ち構えるのもよいだろう。

そのパドック近くにはパドックピクニックというバーがあり、スタンド内にはジャンパンのモエがバーを出している。イギリスの競馬場らしく、お酒を飲む人向けの施設は充実している。食べ物もフードコーナーのところが有り、フィッシュアンドチップスなど、良くも悪くもイギリスの食べ物を出している。

筆者がサンドウンを訪問したのは24年夏だが、なにが驚いたかというと入場料である。確か1万5000円くらいだったと思う。イギリスの競馬場は概して入場料が高いが、一般席でこれはそれにしても、という値段だ。

その理由は行ってみて分かった。バンドのコンサートがあり、通常日より値段が高くなっていたのであ

つたときには場内アナウンスで「重要なお知らせがあります」と言い出したのでなにかと思つたら、「他場から移動してきたデットリー騎手が着いたので、騎手変更があります」だった。そりゃ重要なお知らせだわ、となった次第である。

そしてこの競馬場最大の特徴が、先述したように「スタンドが内馬場にある」ということだ。内馬場になにかしら観戦施設がある競馬場は無数にあるだろうが、「内馬場にのみ」というのはなかなかいいだろう。そのような作りなので、入場者はまずトンネルをくぐって内馬場に行き、スタンドに入る。

スタンドが内側にあるということは、直線の攻防は見られるものの向正面を走っていると見られないということである。なんと思い切った作りだが、来場者は疑問に感じていないようだった。

スタンド自体は小さく、アットホームな雰囲気でもある。筆者が行った日にはイベントかなにかで来ていた往年の名騎手、キアフン・フロン氏と場内で普通にすれ違つた。目立った競馬場グルメなどはないが、キッチンカーも来ていてパーガー類など定番のものは揃って

る。そのバンドとは、マッドネス。正直名前を聞いただけでは思い出せなかったのだが、ググってみて分かった。1981年にホンダ・シティという車が発売されたときに、CMソングを歌い、出演もしていたバンドだ。いろいろあつたのち92年にオリジナルメンバーで再結成し、12年にはロンドン五輪の式典にも出演したそうである。

しかし、ホンダ・シティのCMといえば50代半ばの筆者が小学生のときに見ていたCMだ。そのバンドがいまでも演っているなどということはあるのか？ 同名の別バンドではないのか？ と思つたが、出てきてみたらシティのマッドネスだった。キャリアを考えると、日本だとTHE ALFEEくらいの大御所感だろうか。シティのCMソング「シティ・イン・シティ」は演奏が無かつたので残念である。

交通は、ロンドン市内からだと列車で30分のエッシャー駅に行き、そこから延々歩く。20分くらいか。ヒースロー空港から出入りする場合はいったんロンドン市内へ行くとかかなり遠回りなので、タクシークロウニングで南北方向に直線で行くほうがよいだろう。